PROJECT STORY

みやぎ東日本大震災津波伝承館（石巻市）

広報紙
「Baton（バトン）」

東日本大震災の経験や復旧・復興の過程 そこからの教訓を 現在（いま）そして未来に伝え続ける。

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、宮城県はかつて経験がないほどの甚大な被害に見舞われました。発災からこれまで、県民一丸となって復旧・復興に向けて取り組んできましたが、心の復興やなりわいの再生など、被災者の安心につながる真の復興はまだ道半ばにあります。

一方、歳月は、人々の東日本大震災の記憶を風化させていきます。このような悲しい出来事を二度とくり返さないために、震災を経験していない世代やこれから生まれてくる子どもたちに、震災の記憶や教訓を伝え継いでいくことは大変重要な課題です。

こうしたなか、宮城県では、新たに復興支援・伝承課をつくり、震災の記憶や教訓の伝承に関する様々な取組を行っています。今回は復興支援・伝承課の2人の先輩に話を伺いました。

震災の記憶や教訓を、風化させることなくしっかりと後世に伝え継いでいく

―震災の記憶や教訓の伝承に向けた取組について教えてください。

●菊池（亜）：東日本大震災から11年が経過し、県内各地に震災遺構・伝承施設が完成するとともに、防災教育や震災の記憶を伝え続けるための取組が進められています。一方で、県内各地の震災遺構・伝承施設は比較的新しく整備されたものが多く、それらの認知度を高め、訪れる人を増やすためには、国内外に向けて広く情報を発信していく必要があります。復興支援・伝承課では、こうした震災伝承施設の展示運営や、復興に関する広報・啓発に関する業務を主に担当しています。

―海外に向けても情報発信を行っているのですか。

●菊池（亜）：はい。国内外で今後起こるであろう大規模な災害に対する防災力向上のために、これまでいただいたご支援に対する感謝の意を込めて、様々な形で広く伝えていくことが最大の被災地である宮城県の役割であると考え、情報を発信しています。

より多くの人に復興や伝承について関心を持っていただくために必要なことはなにか

―どのような仕事を担当しているのですか。

●菊池（亜）：これまでに制作した沿岸部の伝承施設や周辺の観光施設を紹介するパンフレットとウェブサイト「みやぎ復興のたび」の内容をより分かりやすくするために、多言語併記だったものを言語別に整理し作り直しました。また、県内4エリア（県南、仙台・松島、石巻、気仙沼・南三陸）のモデルコースを考案し、外国の方の体験記コンテンツも盛り込み、より多くの方に被災地に足を運んでいただけるような仕組み作りを担当しています。SNSを用いて、モデルコースを取材している様子や県内の風景などの投稿も行っています。

●菊池（桃）：これまで、広報紙「NOW IS.」や、SNSでフォトコンテストを行い、応募された写真を使ったフレーム切手の制作を担当してきました。現在は、より幅広い世代の方々に震災復興や伝承に関心を持って頂けるよう、新たな広報紙「Baton（バトン）」や、復興・伝承に関するポスター、パネル、動画の制作を担当しています。

―現在の業務内容の面白さ、やりがいはどのようなところだと思いますか。

●菊池（亜）：私自身、中学3年生のときに気仙沼で東日本大震災を経験し、被災地・被災者を目の当たりにしてきました。苦しい状況のなか復興へと前を向いてきた県民の方々の頑張りを微力ながら国内外へ発信できることにやりがいを感じます。また、生まれ故郷である気仙沼に取材に行った際に、地元の方々に担当している業務の話をしたところ大変喜んでくれました。被災時の話だけでなく、前を向き着実に復興している明るい情報も発信していけたらなと思っています。

●菊池（桃）：広報や情報発信の業務には、自分の制作したモノが世界中に発信されることにとてもやりがいを感じます。実際に広報紙を手に取ったり、動画を目にした方から声を掛けていただけるととても嬉しいです。一方で、震災に関連する情報の内容については、被災された方々の思いなど多方面に配慮しながら発信することを心がけています。

未来をつむぐストーリー

復興・危機管理部
復興支援・伝承課
震災伝承班
菊池（きくち） 亜紀（あき）
平成27年度採用

復興・危機管理部
復興支援・伝承課
震災復興支援班
菊池（きくち） 桃子（ももこ）
平成29年度採用

一人ひとりがかけがえのない大切な命を守り、災害時に「自らの命を守る行動」が実行できる社会を目指して

―震災の記憶や教訓の伝承を、今後どのように展開させたいと考えていますか。

●菊池（亜）：令和4年度に言語別で制作する「みやぎ復興のたび」を宮城県内だけでなく、国内外のたくさんの方々に手に取っていただき、被災地へ足を運んでいただくきっかけになればと思っています。そのためには、パンフレットやオンラインコンテンツをどのようにしたらより広く目にしてもらえるのか、その仕掛けを考えていく必要があると思っています。

●菊池（桃）：現在発行している広報紙「Baton」を、宮城県内だけでなく、震災を知らない全国の方や若い世代の方、観光目的で

来県された方等にも目にしていただき、災害を「じぶんごと」として考えていただくきっかけにしたいと考えています。そのためには、県外の交通拠点に配架していただいたり、SNSやアプリを活用する等、情報発信の方法を工夫していく必要があると思っています。